

2003年建築計画委員会春季学術研究会記録

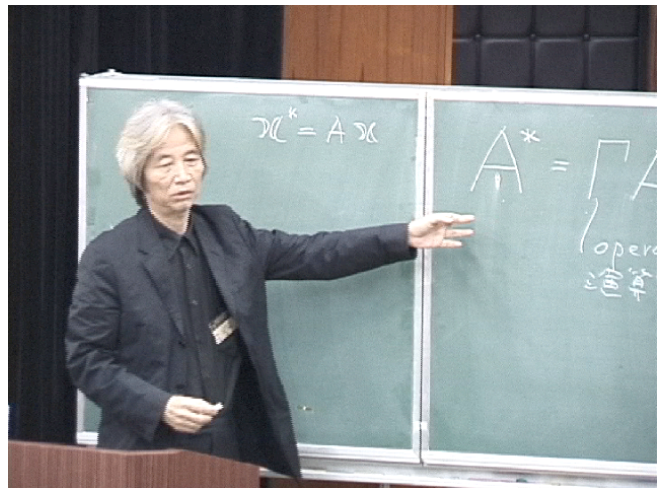
日時：7月12日（土）～13日（日）

本年度の建築計画委員会春季学術研究会は、7月12、13日の両日、札幌ドーム、モエレ沼ガラスのピラミッドの見学を行い、その後北海道大学学術交流会館でそれぞれの施設の設計者である、原広司、川村純一両君に加え、札幌市の松橋勉君、建築計画委員会委員長の服部岑生君（千葉大学）を交えたシンポジウムが開催された。

札幌市に完成した「札幌ドーム」（原広司+アトリエ・ファイ建築研究所）と「モエレ沼公園ガラスのピラミッド」（イサム・ノグチ+アーキテクトファイブ）は、用途は異なるがどちらも大規模な全天候型の活動施設であるということ、また、農業試験場の敷地を背景にした札幌ドーム、モエレ沼公園を背景にしたガラスのピラミッドと、建築とランドスケープとの関係という問題、大勢の人々が集まるという変化を対象とした建築であることなど、建築の可能性と計画の可能性を議論する格好の題材である。それぞれ設計者による解説付きの見学を行った上でのシンポジウムというプログラムであった。

シンポジウムでは、「札幌ドームと様相」というタイトルで、原が建築の時間的変化について講演した。

札幌ドームは、動くサッカーフィールドによって、サッカーから野球、あるいは、各種イベントへと空間のモードを変えてゆく。またサッカーフィールドを出し入れする際に生じる外部との関係性は、季節という外部環境の変化も建築のモードを変える一つの要素として計画されている。建築を計画あるいは、設計する場合のプログラムが多様で複雑な要素を扱うことになることが、変化というものに着目した瞬間に格段に増えるが、原は、それを様相論から導きだされる簡単な数式に置き換え



原広司君

て説明する。建築はスタティックなものではなく、たえず変化しているもの。それを論理的にとらえるために、数式に置き換える。何をどのように変化させ建築を構築するかを計画的にとらえて設計することの必要性を説いた。これは、後段のパネルディスカッションの中でも大きく取り上げられることになる、機能を優先し、一義的決定論をモットーとするモダニズムからどのように脱却するかを示す計画論の方向性につながってゆく。様相論で登場する必然様相とは、建築に置き換えれば、機能を決定して空間を配列させることであり、それに対し札幌ドームは、アクティビティの多様な可能性を計画・企画するような可能様相を意識した建築であるとし、変化する様相を規定する演算子の設計であると定義した。さらに、いくつかの作品を通じて空間の状態の変化を説明した。ヤマトインターナショナルでは、ファサードの操作による反射面の変化、梅田センタービルでは、空間をトラバースすることでのファサードに映り込む要素の変化、広島市立基町高校、京都駅ビル、宮城県立図書館では、人による空間の変化を解説し、いずれの建築においても変化を見通しを持ってつくり、空間の状態を変換させるものとしての建築の有り様を示した。

それに対し、川村は、彫刻家イサム・ノグチのモエレ沼公園マスタープラン作成に関わりながら、ガラスのピラミッドとして残されたスケッチと 1/2000 の模型から建築をどのように構築したかを説明した。ガラスのピラミッド全体を特徴づける概念は、「あわせ」というものであり、建築というより彫刻的な形態を明らかにするために、ガラスとステンレスという異種の素材を用いて（=合わせて）表現の特異性を際立たせている。ガラスを多量に用いていることから発生する日射のコントロールを床の冷暖房を使って行っているところは、季節という屋外環境のモード変換にどのように対応するかを示している。床に敷設されたパイプには夏期は、雪冷房を用いた冷水をまわし、ガラスを通して侵入する日射による負荷を軽減し、冬期は、ボイラーによる温水によって輻射暖房する仕組みであり、同じ床が2つのモードに対応するものとなる。



川村純一君

松橋からは、札幌市が展開した文化と芸術のまちづくりのプロジェクトが紹介された。72 年の札幌オリンピックを契機に 80 年代には都市のインフラ整備をほぼ完了した札幌市は、生活+文化+芸術の振興に政策の方向転換をし、そのうち代表的なプロジェクトが、札幌ドーム、モエレ沼公園、札幌コンサートホール、芸術の森である。札幌市として心掛けたことは、単純に水準の高い施設整備を行うだけでなく、利用水準をあげるために、冬期間の利用頻度を上げる工夫や札幌ドームのようなワールドカップ以降の経営に重きを置いた運営計画の立案など、発注者側からの建築に対する視点を提示した。



松橋勉君

これらを受けるかたちで、服部からは、建築作品の評価という問題提起がなされた。建築計画委員会でも作品評価というものを強く意識した活動を展開していきたいという発言の後、札幌ドームやガラスのピラミッドなどといった大規模な公共施設にどのような共通な評価軸を見出し得るか、それが社会の共通課題になるのかという投げかけがあった。

ここまでの一人ひとりの問題提起によってシンポジウムのテーマは、公共建築の計画・設計にお



服部考生君

ける課題にしばられた。司会野口孝博君（北海道大学）、副司会石黒浩一郎君（アトリエブク）の進行により、原広司氏が口火を切って公共建築のあり方と建築家の役割を論じた。公共建築とは、人々の滞留時間の総和がどれくらいあるか、高度に利用されているかが重要になってくる。経済的に自立性をもつことが必要条件になってくる。経済性を成立させるとは、人が来てくれることであり、そのためにどういうデザインを採用するかを考えることが建築家の課題である。札幌ドームで



シンポジウム

は、イベントがなくても楽しめるようにする。そのために外の風景をつなげていくという考え方が重要であり、ガラスのピラミッドも建築だけでなく、ランドスケープの一つの要素として建築を位置付けているからよい空間が生まれたのではないか。建築はひとつのもの、機能にだけ対応するという考えではもう成り立たない。同時にいろいろなことができることが必要であり、それができるといことはそれだけ豊かな空間であるということである。札幌ドームもプレイヤーのためだけにつくっているのではない。43000人の観衆が主役であり、観客席から観客席の人々を見るときいかに美しく見えるかを考えて設計しているとした。

川村も第一日目の懇親会をドームのボウブリッジのカフェテラスでやった体験を例にひきながら、ドームの空間が風景につながっていることで大規模な空間ではあるが、ヒューマンな親近感をもてることを強調した。その上で、人が集まることを積極的に運営に活かすような行政の仕組みづくりの必要性を述べ、モエレ沼公園では、モエレファンクラブという市民による管理運営の組織づくりが展開していることを報告した。

服部は、人が集まるということの重要性を強調した上で、公共建築はすべからく都市の広場のような存在なのではないかとし、日本にとって公共空間的の広場空間はどうあるべきかという第2の課題を提起した。

原は、人々は新しい公共性を求めている。どういう種類のものでも新しい魅力をつくとそちらに流れてゆく。これからは、離散的社会であり、いろいろな形態の集団が自由に出てくる社会。公園や都市の街角に集まってくる集団は、規定が緩く、一時的につくられる集団である。任意の集団を気持良く受け入れてゆく豊かな空間をつくる。目的の限定性がなく、規程性が低く、時間が限られているという人間の集団が形成されるという状態を認識し、それに対応させる計画が必要とした。

副司会の石黒からは、計画・設計概念の新たな方向性として、札幌ドームもガラスのピラミッドもランドスケープを従来の外構という枠を越えた概念で捉えておりその違いとは何かという指摘があった。それに対して川村は、ガラスのピラミッドは建築家だけではできなかった。基本的にモエレ沼公園は、全部ランドスケープ。ランドスケープの中で、寒いときに入りたいものが欲しいということで、建築が生まれた。もともと建築が先にあったわけではなく、そういう意味で建築とランドスケープが逆転した関係を持っているとした。原も、ガラスのピラミッドは、デバイスの要素を持っているところが魅力であり、札幌ドームは、インテリアすらランドスケープである。つまり限定されずに変化するのは、概念としてランドスケープに近い。

「庭」を構成する植物は、絶えず成長し育っている。つまり、庭と言う概念は、大きな意味を持ち、今までの建築の空間より可能性を持つ。公共建築は変化に対応するという事で言えば、庭のようにつくるといこう

とが必要であるとした。

以上、今回の学術研究大会では、大規模な公共施設を題材とすることで現代の公共施設や建築の持つ典型的な問題を浮き彫りにさせ、今後の建築の有り様にせまる議論が展開された。ランドスケープという概念が建築計画に及ぼす可能性、変化に対応する計画論の必要性、人が集まるという事象の計画論的解釈、公共建築の評価、公共空間の計画論などが新たな課題として明らかになったという意味でも興味深いシンポジウムであった。

(文責：小篠隆生／北海道大学)